

あった。

中隊は株州の街外れにある発電所跡の破壊された家屋付近の部落に露営して、即日わが中隊の主力をもって彈薬・糧秣を受領し、夜間を利用して出発、株州の東南六〇<sup>ノ</sup>地点にある醴陵に孤立している歩兵混成旅団への彈薬・糧秣の補給輸送を行った。わが中隊はこの六〇〇<sup>ノ</sup>の道を突破して、歩兵部隊への補給を完了したのであるが、その当時はこの醴陵は敵の完全包囲下にあり、友軍の歩兵部隊は孤立していたため、食糧や彈薬も全部尽き果てて、非常に危険な状態にあったので、この補給は歩兵部隊から大いに感謝されたのである。

株州―醴陵間の区間輸送の任務は、翌二十年一月まで続いた。我々孤立輜重兵の本領は、第一線の歩兵部隊や戦車部隊のような戦闘能力がなく、第一線の戦闘部隊に彈薬や食糧等を補給する輸送部隊である。これを狙って輸送道路を小刻みに破壊し、地雷を埋設し、輸送妨害や襲撃を繰り返され、宿泊地は敵機の爆撃の目標になり、何度も爆弾投下されたが、幸い不発に終り、命拾いしたこともあった。

明日ありと思う心の仇桜

夜半に嵐の吹かぬものは

という御説法のごとく、人の世は一寸先すら闇である。その生死運命は全く予測できない。私が現在にいたるまでの長い人生の生涯を振り返ってみて、よくぞ今日まで生きてこられたという不思議な思いがする。軍隊でのわれら兵士たちの戦地戦場における日々は、生死これ紙一重の連続であった。

後世の人々に平和な世界を築いてもらうためにも、我々の命がけの戦争体験を風化させてはならないと思ふ。

## 湘桂作戦

岐阜県 道下 政太郎

昭和十九年五月十三日未明、わが輜重金隊出動開始。

本部以下自動車隊一、駄馬中隊四の一個連隊、自分は相変わらず大野重機分隊の軽機であった。将校の指揮するまま護衛の任で行動。広水、孝感、武漢三鎮、崇陽、長

沙へ。第一次、第二次長沙作戰に堅固な長沙は落城しなかつたが、勇猛果敢な第三師団の猛攻には敵も護り得ず、わが軍の占領下となつた。彼我には多数の犠牲者が出て、生臭い匂いが漂っている。これより先、軍行路は戦車場などにより寸断され、自動車は容易に前進できない。

このころよりポツポツ雨期となり、落伍者も出始めた。湘桂鉄道沿いに南へ南へと進軍。大陸は猛暑の季節、名に聞く有名な茶陵の峠二四<sup>キ</sup>もあるという。この日ばかりは昼間行軍で上る。峠半ばにして進まない同年兵の杳名七造だ。功績の駄馬を引いている。この猛暑と疲労に耐えられず心臓麻痺らしい。馬の手綱をしっかりと握つたまま倒れている。早速上衣を脱がせ人工呼吸を施したけれど息は戻らぬ。実に壮烈な戦死であつた。輜重の駄馬は多い。延々三、四<sup>キ</sup>は続く。早くも日没、四辺は暗くなつた。

急に爆音、峠の中腹で隠れ場所がない。敵機一機一〇〇<sup>キ</sup>間隔くらいに照明弾を投下し、あたかも辺りは真昼のように明るくなる。横着にも悠々とわが軍目がけ機銃掃射。山の合間に慌てて集結避難したが、人馬ともに犠

牲が出た。

夜間の機銃掃射は曳光弾、鉄鋼弾、普通弾の三種三様とかの銃弾、赤く焼けて飛びくる弾丸は極めて恐ろしく見える。漸く衝陽に辿り着き任務を交付し、休む間もなく零陵の攻略。輜重隊は零陵郊外の茶山花畑に露営となつた。

敵はわが隊の到着を待ち受けたかのように迫撃砲で攻撃、そして機関銃掃射。わが隊の高橋分隊は迫撃砲ですぐ応戦した。敵は五、六〇〇<sup>キ</sup>向こうの山の中腹、迫と迫との交戦である。迫撃砲の砲身は比較的熱をもつとか、四、五発射撃しては冷却し、スピンドル油を注ぐ。

交互に十数発射撃し、暫時冷却の間五、六<sup>キ</sup>離れた茶山花の陰に休む。折しも敵の迫撃砲弾がわが迫撃砲の筒に飛び込んだ。命中も極まらない。ひとたまりもなく迫撃砲はバラバラに吹き飛んだ。幸いにして兵には負傷もなく無事でよかつた。後は重機関銃と軽機関銃で応戦。彼我とも勝ち目がないと諦めていつしか銃声は止み無事通過した。迫撃砲を失い次の補充まで心細く行動した。

七月半ばともなると毎日寒暖計は四〇度を上下してい

るとか。次第に落伍者は出る。師団全体が約一か月間道  
県付近で駐留することになった。七月二十日付で自分は  
先発上等兵に進級した。同日、後方より追及してきた岐  
阜県駄知町出身の塚本高一兵長と二人、聯隊長伝令とし  
て勤務を命ぜられ、一心に忠実に勤務をする。

約一か月の駐留も終わり、八月半は鉄道沿いに全県を  
攻略、続いて桂林目指して進撃、破竹の勢いの猛進撃に  
住民もあわてふためいて峻険な山奥へ避難する。自分の  
身さえ危ないので可愛い幼子供を捨てて逃げた。この  
柳州街道には子供たちが日射病等で数日置きぐらいに死  
亡している。戦争の犠牲はあまりにも無常、目頭が熱く  
なる。

噂に聞いた中国屈指の景勝地桂林を見ることもなく次  
の柳州へ。南支の西方の重要産業都市柳州には一大飛行  
場がある。今までわが軍に絶大なる被害を与えたであろ  
う。また郊外には米國が経営している壮大な柳州炭坑が  
あり、無煙炭である。

この地で宮崎大佐の率いる騎兵連隊よりぜひ応援タノ  
ムとかの無線連絡により、わが隊本部より長島太平洋長

以下一人応援に行くこととなり、自分もその一員とし  
て隊長より命令を受け出発した。

宮崎隊に来てみれば、一個連隊とはいいながらわずか  
隊長以下三三人、我らを加え四一人、意外の少数部隊で  
将来どうなることか心細くなった。

日没ともなれば毎夜敵兵の夜襲、隊長自ら飯盒の蓋で  
水盂。白鉢巻まで敵に応戦する。敵は少年義勇隊を先頭  
に、パッパと軽い音声のラッパを吹きジリジリとわが  
軍に迫って来る。我らは三個分隊となりワアワアと交代  
に威嚇の喚声を上げる。敵弾は無数に頭上を飛ぶ。止む  
なく数歩下がっては帯剣で浅い穴を掘り応戦した。

いわば敗戦一步前である。白々と夜も明けるころ敵も  
遠く引き揚げていく。このような戦いが十八日間続く。

杉本連隊長はたまりかねて十数<sup>キ</sup>先行の岐阜の〇〇大隊  
に救援を求め、敵軍の一角を撃破し命からがら救われた。  
その十八日間は火も焚けず、生の南瓜、甘薯をかじり、  
水代用に砂糖キビをかじって飢えを凌いだ。宮崎大佐の  
作戦の巧妙と岐阜〇〇大隊の救援、また神仏の加護をつ  
くづく感謝した。これから宮崎部隊はわが輜重隊と行動

を共にすることとなった。

柳州では数回にわたり敵機の爆撃を受けた。幸いにして郊外に待避したので被害もなく柳州を後に柳城、宣山にと進攻、思恩に到着したのは昭和十九年十二月下旬で、この付近のパンチョウ村に駐留。第三師団本部（辰巳中将）は大玄村に駐留、毎日ワラジに竹槍で戦闘訓練。ちよっとの暇に遠く祖国を偲ぶ。内地よりの便りの往復もない。被服はもとより弾薬も年間三〇発で、補給はない。大切にするようにと厳達。訓練もワラジを作って履く。

ある日、宮崎大佐が巡視に来られ、ワラジ作りをジィッと見られ、自分に一足くれよと申され、直ちに立上がり不動の姿勢で敬礼した。そして無頓着でハイと答え一番出来の良いのを一足差し上げた。数日後、大佐は北海道旭川師団に飛行機で転勤された。途中、内地陸軍省に立ち寄り、野戦にてはかくのごとき困苦欠乏に耐えて奮闘していると、我らの作った竹槍、ワラジ等を将官に見せると、持参せられたと連隊長殿より聞いて恐縮した。昭和二十年三月下旬、十一軍より第三師団はソ連国境に

移駐せよとの命令、反転作戦が始まった。

去年攻略しながら進んだこの道、敵状に油断なく柳州、桂林全県へと湘桂鉄道沿いに反転する。残敵と交戦しながら、また敵機の爆撃も夜を昼について盛んとなり、辛うじて長沙に着いたのは八月中旬であった。八月十五日に終戦になったとは誰も知らなかった。

八月二十二日新塩なる部落に到着し、夜、銃器の手入れをしていた。折しも緊急命令受領にまたも敵襲かと緊張する。ことは意外に連隊副官殿より「戦争はわが国の敗戦、八月十五日畏くも天皇陛下よりポツダム宣言受諾の詔勅が下った。今夜中に兵器の菊花の御紋章を削り、何時敵に接収されても支障のなきようにせよ」。余りにも突然の会報に啞然として何も手につかない。在支派遣軍は連戦連勝、もしやデマかと疑うくらいであった。

御紋章を削るにもヤスリなどない。止むなく帯剣でむせび泣きながらに叩き消した。すべての希望を失い、翌日より昼間行動になる。新塩より崇陽、陽新を経て、九江では米国軍艦旗がはためいている。初めて敗戦を実感。この九江郊外において中支軍に武器弾薬、車両

馬匹にいたるまでごとごとく接收され、丸腰極めて淋しい捕虜生活となった。

噂には日本兵は絶対帰国することは得ず、一生中国のクリーとして酷使されるとか、幸いにしてデマであった。支那軍により強い私物検査も数回、六か月余の捕虜生活も苦難の中に終え、昭和二十一年三月八日辰巳第三師團長閣下のお計らいで連隊長以下全員ウースンの港を米國LST貨物船に乗船し、三月十一日懐かしの九州博多港に上陸、感慨無量で故国の土を踏んだ。

日赤看護婦より防疫を受け、臨時列車にすし詰めに乗せられた。窓硝子一つないし、座席の敷布も一枚もない。途中原爆の広島街は跡かたない瓦礫ばかりの惨状。涙なくして見られない。大阪駅に到着、奈良県着中町出身の杉本裕一連隊長殿とも一年八か月の主従のお別れ。三月十三日懐かしの両親の待つわが家に無事生還し、涙ながらに語らい、神仏ならびに先祖に礼拝した。

## 丸亀歩兵第十二連隊激戦回顧

香川県 浮田 信茂

揚子江の濁水は滔々として支那海に注ぎ、黄色い波となり騒ぐ。万里の波濤を蹴って洋上十幾日、限らない支那海をにらんで上陸の一日も早からんことを願う。安達部隊の意気は将に衝天の感がある。輸送船は下弦の月光こうこうと照る揚子江を静かに漕ぎ過ぎて声もない。人影も見えない。

故郷を偲ぶのも今宵限りだ。戦友は最後だよと互いに手を固く握りしめる。いよいよ明日だ。血なまぐさい戦場が待っている。さあ黄海の激流に親をも忘れ、可愛い妻子を捨て、陛下にこの身を捧げよう。東天は白み眼鏡で見渡せば、呉淞鎮は全く廃墟と化し人影もない。

「上陸開始」緊張した上官の号令。陽光を斜めに銃剣は白く光る。上陸船に乗り移り、思わず銃を力一杯握りしめる。鉄かぶとの紐を締めるのは伊達ではない。上陸最